

# ウクライナ・ロシア関係論

## ——ソルジェニーツインのウクライナ論——

阿 部 三 樹 夫

### 1 は じ め に

1991年のソ連崩壊後、ウクライナとロシアの関係は旧ソ連地域だけでなく、ヨーロッパの国際政治の動向を左右する要因の1つになっている。旧ソ連地域においてはバルト三国を除く旧ソ連諸国からなる独立国家共同体（CIS）が、国際組織として存在意義を持ち続けるかどうかは両国の関係に依るところが大きいし、ヨーロッパ国際政治との関連では NATO の東方拡大がどこまで進展し、ロシアがこれにどのように対応するかという問題も、やはり両国がどのような国家関係を結んでいくかで大きく左右される。ソ連崩壊後の両国を巡るこのような新しい状況のなかで、両者の関係をテーマとする研究や両者の「対話」をめざす試みが両国内だけでなく欧米でも見られるようになったことは以前にはみられなかった新しい現象である<sup>1</sup>。

遡って帝政ロシア時代やソ連時代には、このテーマの文献は殆どない。帝政時代にはウクライナは個別の行政単位とは見なされておらず、ウクライナ人も独立の民族とは認められていなかったこと、ソ連時代には連邦制も共和国主権も擬制に過ぎなかったため、ウクライナとロシアの国家関係は問題になりえず、社会主義社会で民族問題は解消したという公式見解のもとで両者の民族関係も深く研究されることがなかったことが、このテーマの研究が少ない原因であろう。

拙稿で取り上げるソルジェニーツインの場合は、ソ連時代から現在まで

## 2 論 説

折に触れてウクライナについて発言している比較的まれな例である。ウクライナを専門に扱った著作はないが、政治的なテーマを扱った著作—『収容所群島 1918—1956 文学的考察』<sup>2</sup>、『甦れ、わがロシアよ—私なりの改革への提言』<sup>3</sup>、『20世紀末にいたる「ロシア問題」』<sup>4</sup>、『廃墟のなかのロシア』<sup>5</sup>の中でウクライナについて多少とも言及している。特に『収容所群島』と『甦れ』とではウクライナ関する見方が微妙に変化しており、この変化はその後の2書に継承されている。以下、拙稿ではこの変化とその背景を考察することでソルジェニーツインのウクライナ論の特徴を考察し、ウクライナ・ロシア関係の一面を明らかにすることを課題としたい。

先ずこのテーマの関連する限りで、ソルジェニーツインの経歴を整理する<sup>6</sup>。

アレクサンドル・イサエヴィチ・ソルジェニーツインは、1918年、ロシア共和国のカフカース山脈北側のキスロヴォツクに生まれた。ソルジェニーツインは、自身がウクライナの血を受け継ぐことを『収容所群島』と『甦れ』で述べている<sup>7</sup>。しかし、ウクライナに関わる自らの出自を詳細に明らかにしているのは、1975年のパスハ（復活大祭）に際してカナダのウクライナ人に宛てたメッセージだけである。それによると、母方の一族はシチェルバクといい、クバン地方に住んでいたウクライナ系の裕福な農家で、母は「殆ど全くウクライナ女性」で、祖父ザハルは生涯ウクライナ語を喋っていた。父はソルジェニーツインが生まれる前に死んだので、この祖父が家族内で唯一の大人の男であり、そのウクライナ語による「生き生きとした話や生活上の教え」は今日まで耳に残っているという。自身はウクライナ語を流暢には話せないが、よく理解できるという。このような出自からソルジェニーツインは「私には大部分ウクライナの血が流れている」と述べているのである<sup>8</sup>。

第二次世界大戦に従軍中の1945年にスターリンを批判した内容の私信を理由に逮捕され、8年間のラーゲリ（強制収容所）を体験、のち数学教師をしながら小説を書き、1962年にラーゲリ生活を主題にした小説『イワン・

デニーソヴィチの一日』を発表し世界的な文学者となるが、以後ソ連内では作品の発表が制限され、国外で発表するという状態が国外追放時まで続いた。その間、サハロフ博士とともにソ連の反体制知識人の中心的な存在であった。

1970年10月にノーベル文学賞を受賞したが、ソ連当局の妨害で授賞式には出席できなかった。1973年にパリで出版された『収容所群島』は世界中に衝撃を与える一方で、ソ連当局からは激しい非難を受け、翌74年ブレジネフ政権によって市民権を剥奪されたうえで、国外追放された<sup>9</sup>。当初西独やスイスなどに2年間滞在したあと、長く合衆国のバーモント州に定住した。亡命中はソ連の共産主義批判だけではなく、西欧文明に対する批判も繰り返し、欧米の言論界では次第に孤立していった。

ゴルバチョフ書記長の主導したペレストロイカの末期にあたる1990年には『甦れ』を発表し注目された。1991年のソ連崩壊後しばらくして1994年5月にロシアへ帰国したあと、新生のロシアに関しては1995年に『ロシア問題』、2000年に『廃墟』を出版している<sup>10</sup>。

ソルジェニーツィンは帰国後の1994年7月24日にロシア連邦の民放テレビに出演して、「私は作家として祖国に帰ったが、ロシアの現状をみて社会活動に参加しないわけにはいかなくなった」と語り、さらにロシア大統領エリツィンの土地私有化に反対を表明するなど、エリツィン政権には批判的な姿勢をとった。エリツィンの後継者であるプーチンについては直接会見するなど、友好的な関係をもっている。ただし2000年にプーチン政権が旧ソ連国歌の旋律をロシアの国歌として復活させたことに対しては厳しく批判している<sup>11</sup>。いずれにせよロシア帰国後は、ソ連時代に「反体制知識人」としてソ連内外で注目を浴びたような活動はしておらず、現実政治からは距離を置いて著述に専念している。

## 2 ソルジェニーツィンのウクライナ論

『群島』は1973－76年にパリで最初に出版され、各国語に翻訳された。粛清と政治収容所のソ連政治体制がレーニンの時代に遡る非人間的な体制であることを、膨大な犠牲者の記録をもと明らかにし、世界中で多大な注目を浴びた。日本語訳は1978年に新潮社から単行本と文庫で出版された。1958年4月から1967年2月までの長い期間に執筆したものだが、ウクライナに関する部分は文中の「20世紀の終わりに近づいた現在」<sup>12</sup>という表現から、この期間の後のほう、すなわち60年代後半に書いたようである。この時期はウクライナでは「60年人」と呼ばれた若い芸術家たちが独自の活動をし、I. ジューバの『国際主義かロシア化か』を初めとする自立出版が現れた時期にあたる。この動きは60年代末から70年代初めにかけて、当局の弾圧でつぶされることになった。また当時のウクライナ共産党第一書記シェレストも1972年に民族主義的偏向ということで失脚した。

ソ連国内では、ブレジネフ時代には『群島』を所持しているだけで逮捕される危険があったが、表現の自由が広がったゴルバチョフソ連共産党書記長主導のペレストロイカの時代に、まず1989年7月から雑誌に連載が始まり、同年秋に3巻本（各10万部）が出て、さらに1991年夏に7巻選集（初版300万部）の一部として出版された。

『甦れ』は、1990年9月18日付の二つの改革派系の新聞の付録として発表された<sup>13</sup>。執筆時期は、論文の末尾に1990年7月とある。この7月には即時独立を主張していたリトアニアに対してゴルバチョフ大統領が経済制裁を始めている。また7月15日にはウクライナの最高会議で主権宣言が決議されたが、ウクライナではまだ分離独立論は少数派であった。ゴルバチョフを始めソ連指導部はこの年の春から連邦制度の改革を目標として新連邦条約の草案づくりを進めていたが、あくまでソ連という連邦国家枠組みの存続を前提とするものであった。このような時期にソ連の12の連邦共和国

を分離して、ロシア人が比較的多数住んでいるカザフスタン北部の領土を含む東スラヴ三民族の連合を創設することを提唱するソルジェニーツインの論文はソ連国内に大きな波紋をもたらした<sup>14</sup>。

『ロシア問題』は1994年3月と日付のある前書きにあるように、ソルジェニーツインがロシアに帰国する前に書いた小冊子で、発行部数は1万部である<sup>15</sup>。17世紀以降のロシア史を振り返って、20世紀末に至るロシアのあり方を論じているが、そのなかで独立後のウクライナに関する言及がある。その続編にあたるのが『廃墟』で、帰国後の1998年に執筆された。本書でも「スラヴ人の悲劇」と題する部分で、独立後のウクライナについて前書の繰り返しや、より踏み込んだ内容の言及がある。

#### （1）ロシア、ウクライナ両民族の歴史について

『群島』と『甦れ』の中に見られる、ロシア・ウクライナ民族の関係から見たロシア史の時期区分は基本的に同じである。ロシアとウクライナとで共通のキエフ時代（9世紀～）→分裂の時代（13世紀～）→17世紀中頃の統一→現在にいたる三百数十年間の統一期間（うち70年間のソ連時代）、という図式である。このロシア史の時代区分はスターリン時代以降のソ連においてソ連史学の公式見解でもあった。『収容所群島』ではキエフ時代については言及していないが、『甦れ』では、この時代に両民族が共通の支配者と宗教で結びついた一つの民族であったことをより強調し、9世紀頃から独自のウクライナ民族が存在していたとする見解を挙げてこれを「真っ赤な嘘」と決めつけている<sup>16</sup>。

分裂時代については、『収容所群島』では両民族の「習慣も言語も別々な方向に発達していった」<sup>17</sup>として、この時期に両民族の独自性が育まれたと捉えているのに対して、『甦れ』では分裂した片方の「リトアニアとポーランドの白ロシア人とウクライナ人たちは自分のことをロシア人と考えて、そのポーランド化とカトリック化に抵抗した」<sup>18</sup>と述べて、分裂時代にも意識上はロシア人としての統一が存在したと見ている。

次に、『収容所群島』ではロシアとウクライナの＜再統一＞という言葉  
を二カ所で使っているが、過去の事実を指している例では括弧付きで、将  
来の希望として用いている例では括弧なしで用いている<sup>19</sup>。他方、『甦れ』  
では過去の事実としても、括弧なしでしかも強調して用いている<sup>20</sup>。この  
＜再統一＞という用語は、ポーランドに対して反乱を起こしたウクライナ  
のコサック指導者（ヘトマン）フメリニツキイが、1654年にロシアと結ん  
だペレヤスラウ条約がもたらしたロシア・ウクライ関係に関する公式解釈  
として、ソ連共産党中央委が1954年の条約締結300周年に際して使いはじ  
めたものである。以後、ソ連の歴史教育・研究ではこの解釈が規範とされ  
た<sup>21</sup>。恐らくこの点を踏まえて、ソ連反体制知識人としてのソルジェニー  
ツィンは、『群島』ではこの公式解釈から距離を置く意味で、過去の出来  
事としてはこの言葉を括弧付きで用いているのであろう。これに対して  
『甦れ』では、過去の出来事としても括弧なしで用い、しかも強調してい  
ることは、ソルジェニーツィンがウクライナの民族史学に対して意識的に  
挑戦しているものと思われる。

統一後の時期、すなわちウクライナがロシアに併合された後の時期につ  
いて、前者は「その後の3世紀をわれわれは無駄に過ごした」<sup>22</sup>として、  
帝政ロシアとソ連によるウクライナ統治を否定的に評価しているのに対し、  
『甦れ』ではアレクサンドル2世時代のウクライナ語禁止令（1863、1876  
年）に言及はしているが、この禁止は「長くは続かなかった」と事実と反  
する指摘（適用上の緩厳があったが、この法律は1917年まで廃止されなかつ  
た）をし、帝政ロシアの「統治政策・宗教政策の驚くべき硬直化の現れ」  
として、帝政ロシアのウクライナ政策の例外的で短期間の事例と見なすこ  
とで、他の時期についてはロシアのウクライナ統治が過酷なものではなかつ  
たことを示唆している<sup>23</sup>。

1917年のロシア革命をうけてウクライナで成立した民族政権については  
『収容所群島』は、ウクライナ民族政権に対するレーニンの民族政策の欺  
瞞性を強調し、ソビエト政権の武力制圧によってウクライナで民族政権が

倒れ、ウクライナ・ソヴィエト政権が成立したことを不当なものと評価している<sup>24</sup>。ところが『甦れ』では中央ラーダなどのウクライナ民族政権を「にわかずくり」、「政治家たちの妥協の産物」「決して国民によって選ばれたものではなかった」<sup>25</sup>というように、当時の革命と内乱という政治的混乱状態では無理な注文を現在の価値観からつけている。

## （２）ウクライナの民族感情・民族主義について

ソ連時代のウクライナの民族意識について、『収容所群島』はソ連時代の「30年代や40年代で最も取り返しのつかない事態になった」、「彼ら（ウクライナ人のこと）の心にどれほど憤激が鬱積しているか分かっている。われわれの世代はこの年寄りたちの誤りに対して償いをしなければならないのだ」、さらに「ウクライナの喪失は痛烈な打撃となろう。だが、今のウクライナ人たちの全民族的な意気込みを認めないないわけにはいかない。」<sup>26</sup>というように、ウクライナ人の間で民族意識が強いことには根拠があるとして、理解を示している。

ソルジェニーツインは、ロシア人がなぜ「ウクライナ人たちの民族主義の強さ」、「分離したいという気持ちにいらだちを覚える」<sup>27</sup>のかと問いを發し、ウクライナ人の希望に理解を示すべきだと述べている。これは修辭疑問としての問いなので、ソルジェニーツインは真正面からこの問いに答え<sup>28</sup>を出していないが、ロシア人とウクライナ人の関係に関して興味深い問題提起ではある。またキエフ出身のロシア人作家ミハイル・ブルガーコフも小説『白衛軍』の中で、ロシア人として「誤った感情」にとらわれている、と指摘している<sup>29</sup>。

他方『甦れ』では「ウクライナがソビエト時代に体験した死の苦しみに対しては、心底から同情しないではいられない」<sup>30</sup>としながら、1990年頃からウクライナで出始めたウクライナ人の分離・独立の要求については「不当な要求」、「軽はずみな分離主義」、「残酷な分離」<sup>31</sup>というように真っ向から反対している。その論拠としてソルジェニーツインが指摘している

問題については後で論じる。

ウクライナ民族主義についても二つの著作では評価が変わっている。『収容所群島』のなかでソルジェニーツインは、出版当時のソ連では政治的タブーであったウクライナの民族主義者に言及している。ソ連では政治的な罵倒の言葉としてしか使われていない「ベンデラー味」や「ペトリューラー味」について、「われわれとは別個の国家を作ろうとしたウクライナの都市住民と農民たち」、「他国の政権を望まない人びと」<sup>32</sup>のことなのだと説明している。勿論このような言説は当時のソ連国内では非合法出版物以外には発表できなかった。非常にウクライナ側に歩み寄った見方といえる。

対して『甦れ』では亡命ウクライナ民族主義者を批判している。ソルジェニーツインは、亡命ウクライナ人民族主義者が自由世界にとって危険なのは共産主義よりもむしろロシア人の征服欲であると主張している、と批判する<sup>33</sup>。ロシア人もウクライナ人をはじめ旧ソ連の非ロシア民族も同じく共産主義の犠牲者であり、「血のにじむ苦悩の体験によってわれわれは結ばれている」<sup>34</sup>と反論するのである。後の『廃墟』でも、反共産主義よりも反ロシアに偏っている北米のウクライナ民族主義者や独立後のウクライナの民族主義者を厳しく批判している。特に独立後のウクライナに現れた極端な民族主義的見解やグループを取り上げて、「ウクライナの民族主義者は少数派に過ぎないのに、全ウクライナを覆うイデオロギーとして無理やり祭り上げられている」と苦言を呈している。さらにウクライナ民族主義者のロシアに対する言動を「精神の病」として、これを相手にしないで「いつか正氣に戻る」のを待とうとロシア人に呼びかけている<sup>35</sup>。

ペレストロイカの時期にウクライナでも噴出した民族感情や民族主義に共通する傾向は、ロシア化に対する主に知識人たちの危惧である。特にウクライナ語がロシア語の普及によって衰退していくことに対する危機意識が強くみられる。このウクライナ語に関して『群島』では分裂時代にロシアとは「習慣も言語も別々な方向に発展していった」<sup>36</sup>と述べて、ウクラ



イナ語の独自性を認めている。他方で、『甦れ』ではオーストリア帝国内の「ガリツァ地方では、オーストリアのてこ入れて、歪められた、民族語ではないウクライナ語がつくれ」<sup>37</sup>た、と述べて、ウクライナ語が外国によって人工的に作られたという見解を示している。これは帝政ロシア時代の、ウクライナ語は「過去も現在も将来も」存在せず、あるのはポーランド語などの影響で歪められたロシア語方言であるという公式見解に近いといえる。さらに『ロシア問題』と『廃墟』でも、独立後のウクライナ政府の言語政策をさらに厳しく批判している。ソルジェニーツインの論点は、ウクライナ語は「専門用語」がなく、「国際的な水準に引き上げるには、まだ数十年はかかる」言語であること、ウクライナでは「63パーセント」がロシア語を「母語」としているにもかかわらず、ロシア語を「第二公用語」としないで、教育、出版、放送の分野でロシア語を「激しく迫害」していること<sup>38</sup>、である。たしかに独立後のウクライナでは「国家語」であるウクライナ語がソ連時代よりも広く使われるようになったが、ウクライナ東部、南部、クリミアではまだロシア語が強く残っており、ソルジェニーツインの論点はかなり誇張ないし単純化されていると思われる<sup>39</sup>。

### （３）ウクライナ独立問題

ウクライナの分離独立問題に関するソルジェニーツインの姿勢を整理すると、『収容所群島』では＜ウクライナ人が分離を望むのであれば仕方がないが、問題は残る＞であり、『蘇れ』になると＜いろいろな問題があるから、分離は不当だ＞といことになる<sup>40</sup>。ウクライナの独立には様々な問題が伴うという点では共通だが、その結論が微妙に異なっている。

ウクライナ独立が伴うであろう問題としてソルジェニーツインが指摘するのは、ロシア・ウクライナ間の国境線確定の問題とウクライナに残されるロシア系住民の問題である。

ソルジェニーツインはウクライナとロシアの領土問題に関して、『群島』では「今日のソ連邦内におけるウクライナ共和国の正式な国境で囲まれた

地域のすべてがウクライナであるというわけではない」として、「ドニエプル川左岸地方の諸州のうちのいくつか」を挙げている<sup>41</sup>。『甦れ』、『廃墟』では現在のウクライナ・ロシア国境がロシア革命のあと、恣意的に確定されたとして、さらに詳しく、ノヴォロシア（黒海とアゾフ海の北岸地方）、クリミア地方、ドンバス地方を挙げている<sup>42</sup>。

この問題についてはウクライナ人の側からは逆に、現在のロシア連邦にソルジェニーツインの祖父が住んでいたクバン地方を始めウクライナ人が多数居住している地域があり<sup>43</sup>、これはソヴィエト・ウクライナ共和国が創られときに領土を不当に削減された結果であるという主張がある。この双方からの領土要求が現実の政治問題となり紛糾すれば両国関係に悪影響を与えたであろうが、実際にはソ連崩壊後のロシアの一部でウクライナに対してクリミア半島の変換を要求する声があがったが、その後両国は1997年に友好条約を結んでソ連崩壊時の共和国間境界のままに両国の国境を確定した。ソルジェニーツインはこの国境線決着に不満を表明しているのである。

ソルジェニーツインによればこうした国境確定の結果、ウクライナ内にロシア系住民が多数残ること<sup>44</sup>、家族や友人が新しい国境で引き裂かれることが問題だとしている。これは『収容所群島』から最近の著作まで一貫した論点である。確かに1989年度国勢調査によればウクライナ共和国には総人口の22.07%（1135万5582人）のロシア人が居住しているが、『甦れ』で「ロシア人が大部分を占める州がいくつもある」<sup>45</sup>と指摘しているのは疑問である。クリミア自治共和国を含め25のウクライナの州のうち、人口でロシア人が過半数を越えるのはクリミア自治共和国<sup>46</sup>だけである。この事実をソルジェニーツインが知らないはずはないから、ロシア化したウクライナ人（おもに言語の面で）をロシア人と見なしていると思われる。他方で「混血があまりに多い。ウクライナ人とロシア人との結婚も多い。」<sup>47</sup>という指摘は事実である。ある算定によると年間の結婚件数のうち民族間の結婚が1959年には15%、1979年には20%、とくにハリコフ市では48%を

占めているからである<sup>48</sup>。

国境の問題と関連してソルジェニーツインが指摘するのは、ウクライナが民族、言語上で均質でないという点である<sup>49</sup>。すなわち、歴史的・地理的な背景から、ウクライナではウクライナ人とロシア人の人口比、ウクライナ人のロシア化の程度と民族意識に地域差が存在することである<sup>50</sup>。これは独立後も選挙結果や各種世論調査で如実に現れており、独立後のウクライナでは経済危機と相まって政治不安の一要因となっている。すなわち、同じく旧ソ連から独立した連邦構成共和国のなかで、ウクライナの独自の課題として、ロシア系住民だけでなくウクライナ民族の間でも国民統合が必要になっているのである。

ウクライナ独立が現実の問題になった段階では、ソルジェニーツインのウクライナ独立反対の理由として、独立に至る手続きの問題が加わっている。1991年の12月1日にウクライナの独立の是非を問う国民投票が実施され、その結果を受けてロシア、ウクライナ、ベラルーシの三首脳がベラルーシのブレスト市近郊のペロヴェーシの森で会談し、ソ連解体と独立国家共同体創設を内容とするペロヴェーシ協定を締結するに至った手続きの問題である。

1991年にソルジェニーツインはロシアの『トルート』誌（10月8日付）に12月1日に実施されるウクライナの国民投票についてメッセージを寄稿した。その中でソ連諸共和国の独立を歓迎するとともに、ゴルバチョフ政権が構想していた国家連合は実現不可能であると述べ、ウクライナの国民投票については、公明正大に行われるのならば歓迎するとして、持論である個々の州住民の意見尊重ということを強調している<sup>51</sup>。ウクライナの州毎に独立の意志を確認して、独立した場合の領土を再画定すべきであるという、この考えは『収容所群島』以来繰り返されている<sup>52</sup>。この指摘は、現代における民族自決権の問題点を突いてはいる。多民族が入り交じって居住している地域では、地域の範囲の取り方次第で、住民の意思の総計が変わってくるだろうし、どこまでの地域範囲で民族の決定をするかという

## 12 論 説

問題は原理的には確定していないからである。しかし、ソルジェニーツインの主張するようにウクライナの各州ごと（あるいはドンバスとか左岸地方等の歴史的地域ごとに）住民の意思を確認し、それぞれ独立かロシアとの統合かを決めるとしたら、さらに收拾のつかない事態になったであろうことは、十分予想できるのも事実である。

12月1日の国民投票では、ウクライナ独立に関して全国で90.3%の支持があり、25州すべてで独立賛成が過半数であった<sup>53</sup>ので、ソルジェニーツインのこの論点は結果的には否定されたといえるが、『廃墟』では国民投票が「不公平な方法で実施された」<sup>54</sup>としてその公正さ自体に疑義を呈している。これは新しい論点だが、そのように主張する根拠をしめしていない。

さらにベロヴェーシ協定について、ソルジェニーツインは、参加者の一人であるウクライナ大統領クラフチュークが、他の参加者であるロシア大統領エリツインとベラルーシ最高会議議長シュシュケーヴィッチに対し、独立後の3ヶ国の間での「実際の強固な同盟、『透明な』国境、唯一の軍隊と通貨」<sup>55</sup>を約束したのに、その後これを破って完全に独立してしまったことを批判している。

ソルジェニーツインが提起している独立の手続き問題に関しては、この三首脳交渉にかんする資料が公開されておらず、現時点ではその当否を判断することはできないが、ウクライナ独立への批判としては説得力を持たないといえる<sup>56</sup>。

ウクライナが現実に独立した後の著作でも、独立に伴ってウクライナに現れた問題を指摘して、「問題の最良の解決」として東スラヴ3民族とカザフスタンの「国家同盟」を提唱している<sup>57</sup>。1994年にはアメリカの『フォーブス』誌のインタビュー記事で、ウクライナの独立について「アメリカ南西部の州が一方的に独立を宣言した」場合になぞらえて批判している。さらに「現在のウクライナの東部と南部は歴史的にロシア固有の領土だった」が、1919年にはレーニンが共産主義を押しつける代償としてウクライナに割譲し、1954年にフルシチョフが、「気まぐれで」クリミア地方をウクラ

イナに譲った、というソ連解体後ロシアの一部で見られた論点を繰り返している<sup>58</sup>。さらにソ連時代にも連邦直轄であった軍事的要衝のセヴァストポリスをロシアがウクライナに譲った背後には、ロシアの弱体化を図るアメリカがいるとして、アメリカの対ウクライナ政策をも批判している<sup>59</sup>。

また1994年8月6日にはロシア連邦オスタンキノ・テレビの番組に登場して「ウクライナとベラルーシのロシアからの分離は第二次大戦後のドイツ分割と似ており時間という試験には合格できない」<sup>60</sup>と、両国の独立は長続きしないという見通しを語っている。

### 3 ウクライナ観変化の背景

ウクライナに関するソルジェニーツインの論調の変化は何時、なぜ生じたのであろうか。

『群島』の観点は国外追放後の1975年にパスハ（復活大祭）に際してカナダのウクライナ人宛に出したメッセージでも踏襲されている。ここでソルジェニーツインは自身のウクライナ人との近さを述べて、「西欧が勇気と理知と分別を失い、次々に諸国を共産主義と無神論に明け渡して滅ぼしている、この恐ろしい時代に、われわれの苦い経験とキリスト教の信仰を踏まえて、お互いに支え合おう」<sup>61</sup>と両民族の共産主義に対する共闘を呼びかけている。

『甦れ』に見られる論調につながる言説で早い時期のものは、瞥見する限りでは、1981年にカナダで「歴史的出会いのなかのウクライナとロシア」をテーマとして開催された研究集会への招聘を辞退したときの公開書簡である。ソルジェニーツインは仕事のスケジュールを辞退の理由にしているが、内容を見るとそれだけではないようである。ソルジェニーツインは亡命ウクライナ人社会の傾向（祖国の状況に無知で独善的とする）や後述の1980年の論文に対する亡命ウクライナ人からの批判を挙げて、「このような雰囲気、このような善悪の区別もつかない状態では、この問題で議論し

ても意味がないし、いかなる対話、会議も成果が無いだろう」と述べている。すなわち今後亡命ウクライナ人は相手にしないという姿勢である<sup>62</sup>。

ここでソルジェニーツインが問題としているのは、誰を敵とし味方とするか、という問題である。ソルジェニーツインは追放されてからまもなく、欧米でソ連共産主義との闘争を呼びかけている。その際、欧米でソ連とロシアとが同一視されていることを懸念していた。1975年9月には「共産主義に囚われた諸民族の会議」に宛てた公開書簡で『ソヴィエトの』という言葉の代わりに『ロシアの』という言葉が無神経かつ無知に用いられている結果、世界共産主義の犯罪と新しい陰謀が、〔ロシア：引用者〕民族に着せられている。この民族は他の民族よりもより早い時期から、そしてより長い間共産主義の犠牲者であり、その悲しみの兄弟—ソ連の諸民族—とともに6600万人を失ったにも関わらずにである。』<sup>63</sup>と述べている。

ソ連軍のアフガニスタン侵攻の翌年の1980年に書かれた『Foreign Affairs』誌論文では、強烈な反共産主義の主張が述べられている。ソルジェニーツインは西欧が危機的状态にあるとして、これをもたらした西欧の誤りを二つ挙げる。一つの誤りは、「共産主義の人間全体に対する過激な敵意を理解していないこと」として、「共産主義と同じ惑星上で共存することは不可能だ」と主張している。もう一つの誤りは「共産主義の世界的病弊とこれが最初に支配したロシアとの間に分かちがたい連関があるときめてかかること」だとし、論文ではおもに後者を取り上げて「アメリカを脅かしている誤認」だと指摘する。この誤認が生じた責任者として、歴史家のR. パイプス、政治家のアヴェレル・ハリマン、ジョージ・ケナン、キッシンジャー等を挙げている<sup>64</sup>。これらのアメリカの歴史家、政治家たちに加えて亡命ウクライナ人もこの誤認を助長していると、ソルジェニーツインが考えるようになったことを示しているのが、先の1981年の公開書簡であり、この点は最近の著作『廃墟』<sup>65</sup>でも繰り返し述べている。従ってソルジェニーツインはこの時期にはすでにウクライナ民族主義への認識を改めていたと言えるだろう。

さらに前述のように1994年の『フォーブス』誌に載ったインタビュー記事では、当時欧米でロシアの大国主義的な動きに対する警戒と関連してウクライナを支援する発言が強まっていることに、つよく反発している。欧米協調路線のウクライナとこれを支援する欧米とが共同して、ロシアを包囲しようとしているという伝統的なロシア民族主義の論点であるである<sup>66</sup>。

これらの言説から分かることは、ソルジェニーツインが追放後の1974年以降、1981年までにウクライナ民族主義に対する認識を改めて、批判的になった、ということである。追放前までのソルジェニーツインが知っていたウクライナ民族主義者は1950年代に収容所で出会ったウクライナ民族主義者の政治犯であり、この人々には共感を感じたという。それに対し追放先のアメリカ合衆国で出会ったウクライナ民族主義者は、反共産主義よりも反ロシアをこととして、合衆国の議会で反ロシアのロビー活動をしていると、ソルジェニーツインは見なしている<sup>67</sup>。

このような現代のウクライナ民族主義に対する批判から、さらに進んでロシア・ウクライナ史の見方、ロシア革命時のウクライナ民族政権の評価、ウクライナ人の民族感情への共感までも変わったことに関しては、ソルジェニーツイン自身はこの経緯を説明しておらず、論理が飛躍しているように思われる。

他の事情として考えられるのは、執筆時期の問題である。『収容所群島』が書かれた時期にはソ連崩壊やウクライナ独立は現実味がなく、少なくとも近い将来の出来事とは考えられなかった。ところが、『甦れ』が執筆された1990年9月には共和国の自立化と連邦制度改革の動きが現れていた。『ロシア問題』と『廃墟』の執筆時期は既にソ連が崩壊し、ウクライナが独立した後である。それぞれ、ウクライナ独立が観念上の問題に過ぎなかった時期、独立が現実味を帯びはじめた時期、そして独立が実現した後の時期という、執筆時期におけるソ連やウクライナを巡る政治状況の違いも、ソルジェニーツインのウクライナ論に見られる変化の背景にあることも考えられる。

## 4 む す び

ソルジェニーツインのウクライナ論はまず自身がウクライナ人の血が流れている者、ウクライナを愛する者として論じるというところに特徴がある。血縁の問題は1990年の『甦れ』までの著作で触れており、最近作の『廃墟』では血縁には言及していないが、やはりウクライナに「親密な感情」<sup>68</sup>を持っていると断っている。これらの指摘が殆どすべてウクライナに関する記述にのみでてくるのも特徴的である。これはうがった見方をすれば、ロシア人としての帰属意識をもっているソルジェニーツインが、ウクライナについて発言するとき、このような出自を持ち出した方が批判しやすいと言うことを暗示しているのではなかろうか<sup>69</sup>。

また、敵味方関係という政治認識上でウクライナ民族主義者にたいする評価が変わったことから、ウクライナの歴史、言語、独立に対する姿勢までも変わってしまったと考えられる点も彼のウクライナ論の特徴としてあげることが出来る。

『群島』と『甦れ』以下の著作に見られるソルジェニーツインの二つのウクライナ論を比較してみると、事実認識の点でも、ウクライナとロシアが対話を進めていく場合のロシア側の基本的姿勢としても、前者の方をより評価できる。後者の立場ではウクライナとの対話は成り立たちにくい。確かに前者にも、ウクライナ側からみると問題が無いわけではない。例えば、ウクライナを「弟分」とする表現や、ロシア人がウクライナ独立を嫌う理由として挙げた例が当を得ていないことなどは、その限界とも思われる。しかしロシアの大国主義志向を否定するなど「健全なロシア民族主義」の寛容な姿勢に貫かれていることも事実である<sup>70</sup>。しかし『フォーブス』誌のインタビュー記事からもわかるように現在のソルジェニーツインは後者の姿勢をより強めており、むしろ帝政ロシア時代のウクライナ語・民族否定論に近づいているように思われる。この姿勢に対してはウクライナ側か



ら批判が出ており<sup>71</sup>、「半分近くはウクライナ人である」ソルジェニーツインでも、現在はウクライナとロシアの橋渡しの役割を担うことは難しいであろう。

拙稿ではソルジェニーツインのウクライナに関する言説を取り上げて、そのウクライナ観の変化と特徴を見てきた。ソルジェニーツインは文学者であり、政治思想家であり、ソ連時代には反体制知識人として人権活動家であったし、国外追放後はおもにロシアの歴史に題材をとった歴史小説家でもある。このようなソルジェニーツインの全体像自体を扱うことは筆者の能力を超えているが、少なくともその思想、活動のなかでウクライナがどのような位置を占めているのかという問題は今後の課題としたい。

#### 注

- 1 アメリカのウクライナ研究の泰斗である O. プリツァクは、ソ連崩壊後にウクライナロシア関係に関する殆ど最初の学術的な試みをまとめた論文集の中で「我々の時代の大きな悲劇の一つは、ウクライナ人とロシア人 — より正確に言うと、この二民族の知識人と政治家— が、過去も現在もお互いにざっくばらんに話し合い、それぞれの、そしてお互いの問題を率直に論じる機会があまりにも少なかったことである」と指摘している。

P. Polichnyj et al. ed., *Ukraine and Russia in Their Historical Encounter* (Edmonton, 1992), p.ix. その後の10年間で以下のような文献が出ている。  
 О.Гринів *Українаі Росія: Партнерство чи протистояння?* (Львів, 1997), *Россия-Украина: история взаимоотношений*, (Москва, 1997), P. D'Anieri *Economic Interdependence in Ukrainian-Russian Relations* (New York, 1999), A. Lieven *Ukraine and Russia: a fraternal rivalry* (Washington, D. C., 1999), R. Solchanyk *Ukraine and Russia: The Post-Soviet Transition* (New York, 2001), M. Shkandrij *Russia and Ukraine: Literature and the Discourse of Empire from Napoleonic to Postcolonial Times* (London, 2001), M. Molchanov *Political Culture and National Identity in Russian-Ukrainian Relations* (Texas, 2002).

- 2 『収容所群島 1918-1956 文学的考察』新潮文庫版、第5巻、1975年、68-72頁。

Солженицын, Александр *АРХИПЕЛАГ ГУЛАГ 1918-1956 ОПЫТ ХУДОЖЕСТВЕННОГО ИССЛЕДОВАНИЯ* (v-vi-vii, Париж, 1975)

- с.47-49, 最近版は : *СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ* том седьмой, (Вермонт-Париж, 1980) с.46-48. 以下では『収容所群島』と略し、頁数は訳書(原書)という形で記す。
- 3 ソルジェニーツイン『甦れ、わがロシアよ — 私なりの改革への提言』日本放送出版協会、1990年、21-27頁。“Как нам обустроить Россию?” Литературная газета (18.09.1990, No.38). 以下では『甦れ』と略す。頁数は訳書(原書)という形で記す
  - 4 Солженицын А. *《РУССКИЙ ВОПРОС》 К КОНЦУ XX ВЕКА*, Москва, 1995. 日本語訳はまだ出ていない。以下では『ロシア問題』*《РУССКИЙ ВОПРОС》*と略す。
  - 5 ソルジェニーツイン『廃墟のなかのロシア』井桁貞義他訳、草思社、2000年。( *РОССИЯ В ОБВАЛЕ*, 1998.) 原書は未見。以下では『廃墟』と略す。
  - 6 ソルジェニーツインの伝記的事実に関しては、特に断らない限り、『収容所群島』、『甦れ』の訳者あとがき(木村浩)、『廃墟』の訳者後記(井桁貞義)、D. Thomas *Alexander Solzhenitsyn: a century in his life* (New York, 1998), J. Pearce *Solzhenitsyn: A soul in exile* (Michigan, 2001). D. Mahoney *Aleksandr Solzhenitsyn: The Ascent from Ideology* (New York, 2001) を参照した。
  - 7 『群島』71(49)、『甦れ』21(2)
  - 8 “Пасхальное обращение к канадским украинцам, 3 мая 1975.” *СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ* том десятый, с.204., Ж. Нива Солженицын (Москва, 1992) с.9.
  - 9 ソルジェニーツインがソ連の市民権を回復したのは、17年後の1990年8月16日で、ソ連崩壊の前年であった。Pearce, *op. cit.*, p.265.
  - 10 ソルジェニーツイン帰国に対するロシアの反応について、1994年5月末の世論調査で「ソルジェニーツイン氏帰国は政治的・文化的に重要な意味を持つ」と見る人が42%、「影響なし」が32%という結果だった。ロシアの各政治勢力の間では、民主派系「モスコフスキー・コムソモーレツ」紙では「飛行機に乗り遅れた」という見出しで「1991年8月に、彼はロストロポーヴィチと一緒に帰国すべきだったのに1917年の事を書いていた」と揶揄されている。民族愛国派のバブーリン議員が「帰国は三年ほど遅かった」、極右のジリノフスキー自民党党首が「10~15年前なら民族愛国派の指導者になれた」と指摘しているように、政治家の間では時期を逸した帰国という見方が一般的であった(以上朝日1994年5月28日付「迎えた祖国は意外にクール」という見出しの特派員報告)。他方で、『独立新聞』12月1日付の「11月のロシアの100人の指導的政治家」と題する人気投票ではソルジェニーツインは

21位と上位に付けている。ちなみにエリツィン是一位、ジリノフスキーは26位、ゴルバチョフは93位であった。*Независимая газета*. 01.12.94 c.5.

11 朝日新聞2000年12月15日付朝刊

12 『群島』71（49）

13 『コムソモーリスカヤ・プラウダ』（部数2650万部）、『文学新聞』（発行部数450万部）。

14 1990年11月21日のインター・ファクスの伝えるところによると、国立世論調査センターの調査で、この論文をソ連国民の38%が読み、うち60%以上がその主張を支持し、批判的なのは14%だけという（12月19日付読売夕刊）。つまり少なくともソ連国民の23%は支持していることになる。しかしこの記事には当時のソ連の最高指導者ゴルバチョフと非ロシア系共和国での反応には触れていない。

ゴルバチョフの反応に関して、『甦れ』の翻訳者木村浩氏は訳者あとがきで「ゴルバチョフ大統領は9月25日の最高会議の席上で、ソルジェニーツィンのことを『アレクサンドル・イサーエヴィチ』と尊敬をこめて呼び、この論文を二回読んだことを告白し、「彼は疑いもなく偉大な人物であり、この作品には非常に多くの興味深い見解、思想が盛り込まれている」と語ったという。また『甦れ、わがロシアよ』は、クレムリンの主をはじめ、ロシアの津々浦々にまでその声が届いたわけである。」と述べている。（169-7頁）

しかし、同年9月25日にゴルバチョフ大統領はソ連最高会議でカザフスタン選出議員の質問に答えて、ソルジェニーツィンのパンフレットを批判し、これが幾つかの民族グループにたいして敬意を欠いており、「破壊的な性格」を持つと述べた。もっともソ連のテレビで放送された所見のなかで、ゴルバチョフはロシアの未来に関するソルの懸念を共にする、とも付け加えた（*The USSR in 1990; A Record of Events*. edited by Melanie Newton, Westview Press, RFE/RL, 1992. p.561）。他の論点は別としても、ソルジェニーツィンのスラヴ三国の連合案は、当時あくまでソ連維持を眼目として新連邦条約の作成を進めていたゴルバチョフにとって受け入れられるわけがなかったはずである。

同じ25日、アルマアタのジャーナリストがRFE/RLに伝えたところによると、9月21-23日にアルマアタで約6000人の群衆が、新しいロシアはカザフスタンの一部を含むというソルジェニーツィンの提議に抗議するために、平和的なデモを行った。抗議者たちはソルジェニーツィンの論文が載った『コムソ・プラウダ』紙、『文学新聞』紙を燃やしたという。タス通信によると9月30日には、トルコ系諸民族とカフカースの諸民族の代表団の創設大会

がによると、30以上の民族政党・社会組織の代表約100名の参加で開かれ、参加者達はソルジェニーツインの見解が中央アジアの人々に攻撃的であるとして、『甦れ』を批判したという。(ibid., p.586)

少なくとも『甦れ』のスラヴ三共和国（とカザフスタンの一部）の国家連合の創設というソルジェニーツインの構想は、当時、あくまでソ連の枠内で連邦制を刷新するという方針に固執したゴルバチョフにも、ソ連からの分離独立を目指した共和国でも支持できないものであった。

日本語版は同年12月20日に日本放送出版協会から出版された。この発行部数や売れた部数は分からないが、ソ連とは違って日本では『収容所群島』出版の時ほど話題にならなかったことは確かである。

- 15 《РУССКИЙ ВОПРОС》 с.112.
- 16 『甦れ』 21 (2)
- 17 『収容所群島』 68 (47)
- 18 『甦れ』 22 (2)
- 19 『収容所群島』 68、72 (47、49) ただし、原書では最初の例は「再統一」“*воссоединение*”という名詞だが、第二例は統一を回復する *восстановить единство*という動詞になっている。
- 20 『甦れ』 22 (2)
- 21 М.Брайчевский “Присоединение или воссоединение?”. Составитель Р. Купчинский *Национальный вопрос в СССР: Сборник документов.* (Сучасність, 1975) с.63-67. ソ連史学では1920年代と30年初めまでは、1654年のペレヤスラフ条約以降のロシア・ウクライナ関係について、ロシアによる併合でありその植民地支配の始まりという解釈が主流であった。その後、ロシア、ウクライナ双方の歴史家の肅清を伴いつつ、この解釈は、ポーランドやトルコによる併合よりは「より小さな悪」だという解釈をへて、ロシアとの再統合によりウクライナの発展が保証されたという公式見解へ行き着いた。以後ソ連崩壊までこの解釈がウクライナ史研究・教育の枠組みとされた。Y. Bilinsky *The Second Republic: The Ukraine after World War II.* (New Brunswick, 1964) pp.210-225. ウクライナの歴史家ブライチェフスキイはこの注の最初の引用文献で、この公式解釈を批判したためウクライナの歴史学界から追放された。
- 22 『収容所群島』 69 (47)
- 23 『甦れ』 22 (2)
- 24 『収容所群島』 69-70 (47-48)
- 25 『甦れ』 23 (2)
- 26 『収容所群島』 70-72 (48-49)

- 27 『収容所群島』 70-71 (48)
- 28 ソルジェニーツインは先の問いに続けて、「オデッサ地方の海水浴場が惜しいのか？ チェルカースク地方の果物が惜しいのか？」と続けているが、ウクライナ人の自立の希望に対するロシア人の感情的反応についての考察としては不十分であろうし、ロシア人の国民性の問題として、考察する必要があるように思われる。
- 29 『収容所群島』 70 (48)、ソルジェニーツインはブルガーコフの『白衛軍』のどの部分で「誤った感情」にとらわれているかを指摘していないが、同書の何カ所かで登場人物がウクライナ語とウクライナ独立について悪態をついていることを指していると思われる。ブルガーコフ著、中田・浅川訳『白衛軍』（群像社、1993年）51-52、54頁参照。
- 30 『甦れ』 25 (3)
- 31 『甦れ』 25, 26, 27 (3)
- 32 『収容所群島』 70 (48) 「ベンデラ主義者たち」 бендеровцы とはリトヴィネンコが指摘しているように、戦間期及び戦後の西ウクライナにおける民族主義者ステパン・バンデラ Бандера の名前に由来する。（И. Литвиненко *Украинская проблема и Россия. Сучаснист*, 1979. с.13.）なぜソ連の用語でバンデラがベンデラに歪められたのかは分からないが、ソルジェニーツイン自身は『収容所群島』の初版では「ベンデラ主義者たち」としているが、後の版では「バンデラ主義者たち」бендеровцы と訂正している。なお「ペトリューラ主義者たち」とはロシア革命後のウクライナ民族政権の指導者シモン・ペトリューラの名前から来ている。どちらもソ連時代には政治的な罵倒の言葉であり、彼等の実像に関する実証的な研究もタブーとされていた。ゴルバチョフによるペレストロイカの時期、1990年頃から両者の著作が合法的に再版で出されたり、研究のテーマに取り上げられるようになった。
- 33 『甦れ』 23 (3)
- 34 『甦れ』 24 (3)
- 35 『廃墟』 107-108
- 36 『収容所群島』 68 (47)
- 37 『甦れ』 24 (2-3)
- 38 『廃墟』 104-106、『ロシア問題』ではウクライナ語が「文化的な役割」を果たすにはあと1世紀以上必要だとしている。《РУССКИЙ ВОПРОС》с.92. ソルジェニーツインは *Forbes* 誌インタビューでも (119頁)、『ロシア問題』でも (91頁)、『廃墟』でも (104頁)、ウクライナでは人口の63%がロシア語を「母語」(native language, основной язык, родной язык) としてい

ると指摘しているが、これは1989年のソ連最後の国勢調査結果の読み違いと思われる。同調査の結果に依れば、様々な民族を含むウクライナ総人口のうち、ロシア語を「母語 родной язык」とする者は32.8%であり、ウクライナ語を「母語」とする者は64.7%である。ちなみにウクライナ民族でウクライナ語を「母語」とするのは87.7%で、ロシア民族でロシア語を「母語」とするのは98.4%である。なお、この「母語」と日常的に家庭や仕事場で使用している言語とは一致していない。ウクライナ語を「母語」としていて、日常的にはロシア語を話しているウクライナ人が数多く存在することは多くの文献が指摘しているところであり、いわゆるロシア化の傾向として重要な問題ではあるが、ソルジェニーツインが挙げる63%のロシア語の母語率というのは間違いである。

- 39 T. Kuzio *Ukraine: State and nation building*. (London&New York, 1998) pp.170-197. 例えば1991-2年度、1993-4年度、1994-5年度の各学年における初中等教育での教育用言語の変化をみると、ウクライナ語は49%→54%→57%で、ロシア語は50%→45%→43%と変わっている。確かにウクライナ語による初中等教育が増加しているが、ロシア語が排除されているというのは誇張である。特にクリミア州では97.7%、ドネツク州では95%、ルハンスク州では91%がいまだにロシア語で教育がなされている。(ibid., p.172-3)
- 40 『甦れ』ではウクライナの独立の代わりに東スラヴ3民族からなる「ロシア連合」Российский Союз 創設を提唱している。『甦れ』14(1)。
- 41 『収容所群島』86
- 42 『甦れ』25、『廃墟』103-104
- 43 ウクライナ民族主義とは距離を置いているカナダのウクライナ系学者の P. R. マゴシによれば、ウクライナの「政治的領域（領土）」political territory が60万1000平方 km であるのにたいして、「民族・言語領域」ethnolinguistic territory は74万7500平方 km であるという。差し引いた領域14万6500平方 km はほとんどがロシア領土内にある。P. R. Magocsi *Ukraine: Historical Atlas*. University of Tronto Press, 1985, map 1.
- 44 『廃墟』では1200万人という数字をあげている、5頁。
- 45 『甦れ』25(3)、原文を直訳すると、「州全体でロシア人が優位に立っている州（複数）」。
- 46 クリミア自治共和国ではロシア系住民が162万9542人で総住民の67.05%であり、25.75%のウクライナ系住民に対して多数派となっている。*Results of the All-Union 1989 Census. Volume VII, Nationality Composition of the Population of the USSR. Part 2*. (Minneapolis, 1993) p.82.
- 47 『甦れ』25(3)

- 48 B.Krawchenko *Social change and national consciousness in twentieth-century Ukraine*. (Macmillan,1985) p.175.
- 49 『収容所群島』では注の部分（86頁）で、『甦れ』は25、27頁。
- 50 Krawchenko, *op. cit.*, p.190の表くウクライナ各地域における民族帰属意識>参照。
- 51 “Обращение к референдуму 1 декабря 1991 г.” *Труд*, 08.10.1991.
- 52 『収容所群島』86、『甦れ』25
- 53 ロシア系住民が多数派であるクリミア自治共和国では54.2%が独立を支持した。これは他の州に比べると圧倒的に少ない数字だが、過半数には違いない。
- 54 『廃墟』50
- 55 『廃墟』51、100頁
- 56 ヴェロヴェーシの森において三首脳がソ連解体の決定をした過程についてはまだ不明な部分が多い（中沢孝之『ベロヴェーシの森の陰謀』潮出版社1999年 8-9頁）。ソルジェニーツインが指摘するクラフチュークの約束違反も事実関係は明らかではない。
- 57 《РУССКИЙ ВОПРОС》 с.91, 93.
- 58 ソルジェニーツインはロシア政府がこのようにウクライナに「ロシア人のものである何十という広大な州…を惜しげもなく譲渡」したのに、「ロシアに帰属していたことは一度もない」「千島列島を返還することを拒んできている」と批判している。ここで千島列島といっているのは「北方四島」のことであろうが、屈折した形ではあれ「北方四島」の返還に公然と賛成するソルジェニーツインの姿勢は、現在のロシア知識人のなかでは稀な例である。（『廃墟』60-61頁）
- 59 “Zhirinovsky is an evil caricature of a Russian Patriot”, An Interview with Solzhenitsyn, By Paul Klebnikov, *FORBES*, May 9 (v.153, no.10), 1994., p.119. これは1994年始めに、ウクライナが戦略核をロシアに移送し、スタート I の批准をすることに合意した代わりに、米・英がウクライナの現国境維持を保証したことを指していると思われる。
- 60 読売新聞1994年 8 月 8 日付朝刊。
- 61 “Пасхальное обращение к канадским украинцам, 3 мая 1975.” *Собрание сочинений* том десятый, с.204-205.
- 62 “Open Letters to the Conference on Russian-Ukrainian Relations and to the Conference of Peoples Enslaved by Communism (Strasbourg).” (September 27, 1975) in the book: *Ukraine and Russia in Their Historical Encounter*, ed. by P. Polichnyi et al., (University of Alberta, 1992), p.336.
- 63 “Конференции народов, поработанных коммунизмом

- (Страсбург)”, *СОБРАНИЕ СОЧИНЕНИЙ* том десятый, с.227. 英語版では犠牲者の数は6000万人となっている。Potichnyj et al. ed. *Op.cit.*, p.336.
- 64 “Misconceptions about Russia are a Threat to America”, *Foreign Affairs*. Spring 1980, vol.58, n.4.
- 65 『廃墟』101頁
- 66 *FORBES*, May 9 (v.153, no.10), 1994. p.119.
- 67 『廃墟』100頁、ソルジェニーツインは1959年に成立した「隷属化にある諸民族」に関するアメリカ合衆国公法86-90がアメリカにおいてロシア像を歪め、ソ連の共産主義よりもむしろロシア膨張主義への敵意を高めたとして、その成立に関わったのが「ウクライナの民族主義者（国会議員ドブリャンスキー）」だ、と名指している。同書、41、101頁。
- 68 『収容所群島』では「ウクライナとロシアは私の血の中で、心の中で、また頭の中でひとつになっている」（71頁）、『甦れ』では「私自身、半分近くはウクライナ人であり」（21頁）、と述べている。『廃墟』では「ウクライナにきわめて親密な感情を抱いて」おり、「ウクライナを愛している」（105頁）とは述べているが、自身の出自については言及がない。
- 69 軍人出身の著名な政治家 A. レベジも旧ソ連の民族問題を語るとき、次のように自身がウクライナの血を受け継いでいることにふれている。「…ここというロシア人というのは何も人種的ロシア人を指すわけではない。私個人について言えば、ウクライナ人の血が半分入っている。だが、大事なのは、言語、文化、教育の3つの点でロシアが母国だということだ。」『SAPIO』1996年1月24-27日号、39-40頁。
- 70 『収容所』71（41）、『甦れ』19（2）。
- 71 「ジリノフスキ現象の精神的指導者」と呼ぶウクライナ民族主義者の非難もある。Т. Кошляба “Духовный вождь жириновщины.” Українське слово 30 червня 1994 р.
- ただし、ソルジェニーツイン自身は『フォーブス』誌でのインタビューでジリノフスキーを「ロシア愛国者の邪悪な戯画」とであると批判して、極端なロシア民族主義やパン・スラヴ主義からは距離を置いている。少なくとも、ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタン以外に関しては、ソルジェニーツインを「リベラルな民族主義者」というダンロップの評価や、「ソルジェニーツインの民族主義は正教信仰に基づく文化の再建、再生をもとめる」ものであり、「非戦闘的であり、反植民地的」だというカーターの特徴付けは現在でも有効だと思われる。J. Dunlop *The Faces of Contemporary Russian Nationalism*. (Princeton, 1983) p.156, S. Carter *Russian Nationalism* (London, 1990) p.69.